

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 吉田 さち

吉田さち氏の博士論文「日本在住コリアンのニューカマーにおける二言語併用」の審査結果について報告する。

本論文は、日本在住コリアンの中でも比較的最近日本に来た、いわゆるニューカマーを対象とし、韓国語と日本語の二言語併用の実態について調査分析したものである。近年、ニューカマーの割合が増加しているにもかかわらず、日本在住コリアンの言語に関する研究は、多くがオールドカマーを対象としたものであり、ニューカマーに関する研究はあまりなされていない。本論文は、ニューカマーでも韓国系民族学校の高校生および韓国人留学生という、比較的若い世代の人たちを対象とし、(a)社会的二言語併用、つまり、場面や相手など社会の中での二言語の使い方と、(b)個人的二言語併用、つまり、コードスイッチングなど個人の中での二言語の使い方、という2つの観点から彼らの二言語併用を分析することによって、その二言語併用の実態を詳細に明らかにしようとしている。

本論文は、9章からなり、第1章では研究の目的と論文の構成について述べ、第2章では日本在住コリアンコミュニティの状況についてその概要を述べている。さらに、第3章では、移民言語の言語接触に関する基本概念について、本論文での立場を提示し、第4章では、先行研究の未解明な点と本論文で取り組む点を明らかにすることによって、先行研究と本論文の位置づけを明確にしている。

第5章と第6章では、民族学校の高校生と留学生に対して行ったアンケート調査をもとに、社会的二言語併用の視点からの分析を行っている。まず、第5章では、韓国系民族学校における社会的二言語併用について、民族学校の高校生212名を対象としたアンケート調査の結果をもとに、第二言語の能力および韓国語と日本語の場面による使い分けに焦点を当てて分析を行った。この調査の対象者には、ニューカマーだけでなく、オールドカマーもおり、分析の結果、次のようなことが明らかになった。オールドカマーにおいては、日本語中心のモノリンガルな言語使用が定着しており、韓国語の能力面では、受容技能が産出技能に比べて相対的によく習得されている。これに対し、ニューカマーにおいては、主流言語の日本語は比較的短期間で習得される一方、継承語である韓国語能力は滞在年数に比例して喪失される傾向にあること、また、ニューカマーの韓国語能力の保持には、「維持型バイリンガル教育(例:韓国政府のカリキュラムの実施や教授言語としての韓国語の使用など)」が大きく貢献していることが明らかになった。このほか、ニューカマーとオールドカマーに共通する言語使用上の特徴として、目上や年配の相手ほど韓国語を使用する割合が高い点も指摘している。さらに、二言語併用集団の分類方法として、移動指数という話者の「移動性」を示す総合的な指標を設定することにより、移動性にしたがって言語シフトが連続的に進行している様相を明確に捉えられることを示し、移動指数という指標が、グローバルで多様な移動歴を持つ現代の移住者集団の言語シフトを分析する枠組みとして有効であることを指摘した。

第6章では、留学生109名を対象としたアンケート調査の結果から、第二言語の能力および、ドメイン(Fishman 1972)の概念を用いて、留学生における主要なドメイン(【学校】、【職場】、【宗教施設】、【近所】、【普段行く店】、【休日】、【生活全体】)での二言語併用について考察している。分析の結果、留学生は韓国社会への帰属意識が強く、オールドカマーや在米韓国人に比べると、移住先でコミュニティを維持するという意識は強くないこと、日本語能力は、受容能力(聞く・読む)が産出能力(話す・書く)よりも優勢であり、これは話しことばの技能が優勢な民族学校高校生とは異なり、むしろ、オールドカマーと共通していることを指摘している。さらに、ドメイン別の接触度と言語使用について分析した結果、留学生の日常生活には、韓国人韓国語優

勢ドメイン、日本人日本語優勢ドメイン、韓国人日本語優勢ドメインがあること、特に、休日や教会など私的な領域で韓国人との社会的ネットワークが形成され、韓国語が使用されていることを明らかにした。一方、学校や職場など公的な場面では、接する相手を問わず、日本社会の主流言語である日本語が使用されていることも指摘している。

第7章と第8章では個人的二言語併用の視点から、談話資料をもとにして、対話での言語選択とコードスイッチング(CS)に着目した事例研究を行っている。まず、第7章では、韓国系民族学校の女子高校生同士の自然談話を収集し、そのデータを用いて話者の来日時期が、言語選択やCSにどのように関わっているのかを考察している。分析の結果、来日時期（臨界期以後に来日／臨界期以前に来日／日本生まれ）により、発話で選択される言語や文内CSの特徴に違いがあり、来日時期が早くなるに従い、韓国語の発話に日本語の要素を挿入する挿入型CSから、韓国語と日本語を発話内で交互に切り替える交替型CSに移行する傾向があることを指摘し、これは世界の移住者集団に共通する特徴である、「L1を基盤とした挿入型のCSから交替型のCSへ移行する一般的な傾向」(Singh & Backus 2000)を支持するものであると述べている。

第8章では留学生の談話における言語選択やCSの実態について、留学生同士の談話資料を用いて考察している。分析の結果、留学生の談話では主に韓国語が使われていること、混用コードでは、韓国語を基盤として日本語の単語を挿入する挿入型CSの性質が強く見られ、その傾向は臨界期以後に来日した高校生より顕著であることを明らかにしている。さらに、高校生との違いについて、民族学校では混用コードが集団内のコードとして定着しているのに対して、留学生では混用コードが集団内のコードとして定着していないためではないかと指摘している。

最後の第9章では、これまでの考察のまとめと今後の課題を述べている。

本論文の特徴は、まず第一に、社会的二言語併用と個人的二言語併用の両観点から包括的に言語使用状況を明らかにしたことである。従来の在日コリアンに関する研究は、どちらか一つの観点のみに限られており、二つの観点から論じた研究は本論文が初めてであろう。第二に、従来研究があまりなされていないニューカマーを対象にしたことである。近年その数が増えているにもかかわらず、ニューカマーの言語状況については、十分な研究がなされていなかった。第三に、分析において従来にない新たな指標や基準を使用したことである。対象者の多様な属性を反映させる方法として移動指数という指標を使ったり、日常生活での言語使用状況を詳細に把握するため、ドメインという概念を使うことにより、従来の研究に比べてより詳細な分析を行っている。これは、在日コリアンの言語だけでなく様々な移民コミュニティにおける言語の分析においても有効なものである。本論文は、在日コリアンの言語に関する研究を従来より一段階高い水準に引き上げたものであり、社会言語学だけでなく、移民コミュニティに関する他の諸分野の研究にも影響を与えることであろう。

審査においては、本論文の分析が在日コリアン社会全体の状況や調査対象者の生活状況と結びついていない、背景となる社会状況を含めた分析に努めてほしいとの指摘があったほか、コードスイッチングの分析に関してその定義について若干疑問があること、数量的な分析だけでなく質的な分析も望まれること、また、移動指数を使うことの意味が明確でないこと、指数化することのデメリットについても考慮する必要があること、さらに、ドメインの枠組みで明らかになったことについて、今後は参与観察などを行いアンケート調査の結果との関係を探る必要があることなど、今後検討すべき課題がいくつか指摘された。また、先行研究との比較が不足していること、統計処理に関していくつか疑問点があることなども指摘されたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。